

第2回茶禅一味の会 (新潟大会) 概況報告

三浦 眞風

第2回茶禅一味の会は、平成21年9月、残暑の中、田園の広がる新潟市郊外で行われた。日程は次の通り。

- 1日目：9月4日(金) 夕方 一般参禅会 (於人間禅秋葉道場)
- 2日目：9月5日(土) 午前 一般参禅会 (於人間禅秋葉道場)
夕方 交流懇親会・講演会 (於大栄寺)
- 3日目：9月6日(日) 午前 茶席 (於北方文化博物館)
午後 講演会 (於大栄寺)

1 一般参禅会

この一般参禅会は、希望する一般の人(茶人)の参禅体験会。師家(指導者)は人間禅総裁葆光庵丸川春潭ほっこうあん しゅんたん老師、場所は秋葉山中腹に位置する秋葉禅道場。

1日目は、午後4時から結制茶礼(開始式)、オリエンテーション(静坐と参禅の仕方)、2回の静坐と2回の参禅、総裁法話、10時に就寝。

2日目は、5時起床、2回の静坐と2回の参禅、9時30分に円了茶礼(終了式)。

一般参禅者数は、男女合わせて十数名だった。4回の参禅体験があ

ったが、皆どんどん参禅に行くのでびっくりしてしまった。しかし、見解を持って行ったのではなく、「行けと言われたから行った」というのが真相らしかった。皆、初めは何が何だか分からないという風情だったが、この体験から入門を決意した男性が一人出たのは喜ばしいことだった。

2 茶禅一味の会交流懇親会並びに講演会

2日目の講演会・交流懇親会は、秋葉禅道場から車で20分ほどの大栄寺で行った。ここは大茶会々場の北方文化博物館に隣接しており、常時10名程の雲水が修行している曹洞宗の専門道場である。宗派の違いを超えて、この会のために快く貸していただいた。

交流懇親会は、まだ明るい西日の射す大広間で午後4時から行われた。出席者は、芳賀徹先生、伊藤文吉館長、葆光庵総裁老師、了空庵無繩老師をはじめ、全国から集まった茶席10席の社中の人達、新潟のお茶人など、総勢130名ほど。

林大道さんと小田守琮さんの司会によって、それぞれの社中の紹介や明日の茶席の案内、意気込み、興味あるエピソードなどが披露され、にぎやかな懇親会になった。

早めに懇親会を終え、講演会場の本堂に移動。本堂は、正面に本尊が安置され天井が高く、太く大きな円柱が何本か立っている。聴衆は本尊を背にして柱の間から講師や講師の書く白板を見るようになっている。

講師は、熊倉功夫林原美術館々長。演題は『利休の茶の湯』。『南方録』の中の逸話から、津田宗及が利休の茶室に訪ねた時の神経細やかな客ぶり。また、道で見かけた花入れに対する師の武野紹鷗じょうおうと、弟子の利休との想い。酒食の後にもかかわらず、300名ほどの聴衆は熱心に聞き入り、講演後にも高度な質問が出て、新潟の茶人の関心の高さを表していた。

3 茶禅一味の会大茶会

大茶会は3日目の午前9時から午後1時20分まで、会場を北方文化博物館に移して行われた。北方文化博物館は400年続く、旧大地主の邸宅で、「豪農のやかた」として、観光名所にもなっている。豪壮な部屋、古民家、茶室などたくさんの部屋があり、次の10の茶席が設けられた。

裏千家・薄茶（柳本宗閑社中） 茶道石州流^{いけいかい}怡溪会・薄茶（鈴木五節子社中） 宗徧流・薄茶（青木宗勢社中） 有楽流・薄茶（林蘭水社中） 石州流清水派・薄茶（井本光蓮社中） 有楽流・濃茶（佐藤妙水社中） 藪内流・薄茶（伊藤慈瑛社中） 表千家・薄茶（渡邊宗睦社中） 上田宗箇流・濃茶（小畠光禅社中）前半

肥後古流・濃茶（中村慈光社中）後半 表千家・濃茶（藤岡令薫・梶原玉香社中）参加者総勢460名。当初は想像もできなかった大茶会となった。

快晴に恵まれ、華やかな着物姿の茶人と、観光バスで博物館見学を訪れた一般観光客が入り混じって、広い敷地が狭く感じられた。

茶席は、まず亭主のあいさつ、次いで静坐5分、『茶味』の群読10分ほど、それから茶事30分ほど。計50分間を午前9時半から午後1時過ぎまで4席。静坐と群読のリーダー



北方文化博物館 裏座敷



北方文化博物館 裏座敷茶席



北方文化博物館 新座敷茶席

は人間禅の会員10名が務めた。人間禅若者・学生の会々員が受付や案内、写真撮影を務めるなど、若々しい活躍が目を引いた。

これだけの大会場をこの会のため整備した北方文化博物館の心づかいも大変だったろうと想像される。

4 講演会

講演会は、3日目の午後1時半から4時、会場を大栄寺本堂に戻して行われた。

残暑厳しく、本堂の戸を開放して風を通したが、400名の熱気で扇子を動かす人が多かった。

まず伊藤文吉北方文化博物館々長のあいさつ。大地主の館だった現博物館が、戦後の農地解放と米進駐軍の政策によって取り壊されそうになった危機を、関係者の努力によって避け、文化遺産として認められ民間博物館第1号となったこと等。伊藤館長の幅広い交流と人柄を彷彿とさせる内容。

次は芳賀徹東京大学名誉教授の講演。『^う失せざる花 老いと芸術』と題して、山上憶良・世阿弥・松尾芭蕉・ゲーテ等の作品を通して、老いてますます深まる芸術について。深い学識から引き出される豊富な事例をあげて、軽妙なジ



芳賀徹先生の講演（大栄寺本堂）



堀井無繩老師の講演（大栄寺本堂）

ヨークで聴衆を笑わせながら、老いていく者の生き方を示唆するもの。

最後は了空庵堀井無繩老師。演題は『茶のころ・禅のころ』。百丈和尚の「一日作さざれば一日食らわず」の作すは正念に住し、自利利他円満の行を行うこと。この正念で

点てる茶こそ真の茶道であること。禅定三昧、点茶三昧というように、茶禅一味を結ぶものは三昧であること等。懇切ていねいな語り口で、お茶の先生方は良く理解できたと思われる。

5 参加者の感想

大会参加者からアンケートをとった結果、200近い感想や意見が寄せられた。

その中で多くを占めたのが、次の二つである。

(1) 会場（大栄寺・北方文化博物館）の素晴らしさ、スタッフの働き、円滑な運営を称賛するもの。

(2) 講演が多過ぎ、時間が長く、休憩時間もなかった。精選すべきである。

この他いろいろの貴重な意見や苦情があった。

アンケートは、情報の山、宝の山である。是非、アンケートを精細に検討し、今後のあり方に生かして頂きたいものと思っている。

6 最後に

これほどの大行事を成し遂げることができたのは茶禅一味の会記念茶会実行委員会のご努力をはじめ、全国の人間禅の関係者、新潟のお

茶人、会場主等の方々のご協力の賜物と、篤く感謝申し上げます。

合掌



北方文化博物館 正門

著者プロフィール



三浦眞風（本名 / 勲）

昭和18年生まれ。東京理科大学卒業。元新潟青陵高校教員。昭和48年、人間禅芳賀洞然老師に入門。現在、人間禅布教師。